

京都大東南アジア地域研究研究所(京都市左京区)が、図書室として利用している歴史建造物の保存活動に力を入れている。建物はもともと、明治期に渋沢栄一が設立に携わった「京都織物」の社屋で、赤れん

が建築として市内でも最古級の歴史を持つ。今秋の「京都モダン建築祭」に参加したり、歩みを学ぶ講演会を開いたりして、レトロな建物の存在を市民にアピールする。

渋沢栄一ら創業/アウンサンスーチャーさんゆかり

旧京都織物社屋 PRへ



明治期建築 現在は図書室



●東南アジア地域研究研究所の図書室として利用されている「京都織物」の元事務所(京都市左京区)●図書室には、元京都大客員研究員として研究に励んだアウンサンスーチャーさんのコーナーもある

赤れんが市内最古級

京都織物は1887年、西陣織の発展や京都経済の復興のため、渋沢ら多くの実業家が開いて設立された。本事業務所となる建物はフランスの織物工場を模し、89年頃に完成したとされる。内部は改修されているが、階段などは往時の雰囲気を残し、外観は当初の状態を保っている。

京大東南アジア研が保存活動 建物には川端通沿いにあり鴨

川から洋風の外観が目立ったが、2008年に京大の新棟が完成すると、通里から隠れる形となって存在感が薄まったという。今夏に国の登録有形文化財に指定されたことを受け、産業遺産として市民に広くPRする企画を始めた。11月1日には特別講演会「京都織物と渋沢栄一」を建

物に隣接する京大稲盛財団記念館で開く。日本経営史を専門にする京都産業大の松本和明教授が講師となり、京都織物に関わった人物を解説する。相談役に就いた渋沢栄一のほか、京都で数多くの会社設立に関わった実業家・浜岡光哲らの役割にもスポットをあてるという。

また、明治時代以降の近現代建築を一堂に公開する京都モダン建築祭(1日開幕)にも参加する。2日に有料のガイドツアーを開催する予定だ。

図書室は、東南アジア関係の資料が国内最多という約10万冊あり、海外研究者の利用も多い。同研究所は昨年、歴史ある建物と所蔵資料の保存に向けた基金を設立し、市民や企業に協力を募り始めた。同研究所の大野美紀子准教授は「貴重な建物と図書室としての機能を次世代へつなぐため、市民に存在を知ってほしい」と話している。

1日午後4時からの講演会は参加無料(定員70人)で、参加者の交流会も予定している。申し込みは同研究所のホームページから。

(川辺晋矢)